博雅文库
BOYA WENKU

日语的逆接接续表现

苏 鹰/著

華東理工大學出版社

博雅文库
BOYA WENKU

日语的逆接接续表现

RIYU DE NIJIEJIEXU BIAOXIAN

華東理工大學出版社

图书在版编目(CIP)数据

日语的逆接接续表现/苏鹰著. —上海：华东理工大学出版社，2009.3

ISBN 978-7-5628-2408-4

Ⅰ.日… Ⅱ.苏… Ⅲ.日语—研究 Ⅳ.H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2008)第 160170 号

日语的逆接接续表现

苏 鹰 著

责任编辑 / 常海霞
责任校对 / 张 波
封面设计 / 戚亮轩
出版发行 / 华东理工大学出版社
地 址：上海市梅陇路 130 号，200237
电 话：(021)64250306(营销部)
(021)64252717(编辑室)
传 真：(021)64252707
网 址：www.hdlgpress.com.cn
印 刷 / 常熟华顺印刷有限公司
开 本 / 890mm×1240mm 1/32
印 张 / 8.75
字 数 / 250 千字
版 次 / 2009 年 3 月第 1 版
印 次 / 2009 年 3 月第 1 次
印 数 / 1—1050 册
书 号 / ISBN 978-7-5628-2408-4/H·786
定 价 / 48.00 元

(本书如有印装质量问题，请到出版社营销部调换。)

序

苏鹰于2005年9月进入广东外语外贸大学外国语言学及应用语言学专业博士课程学习，在学期间积极活跃于日语研究的第一线，如参加各种学术会议，独立或者跟导师合作发表研究论文等。苏鹰属于那种善于学习、思维敏捷、有较强独立研究能力的人。她以前的研究领域主要是日语语法学，入学之后改而从事认知语言学的研究，她除了日语的专业课程外还积极选修英语的语言学专业课程，为博士论文课题的研究打下了坚实的基础。通过她自己的努力，在短短的3年里就完成了博士论文并顺利通过答辩。

该论文以接续助词“けど”、“のに”和接续词“しかし”、“ところが”四个表达形式为对象，以接续的意义连续性为重点，结合认知语言学和语义学的观点对日语的逆态接续表达进行了研究，并作出了统一的理论上的解释。该论文将认知语言学的“F—G关系”概念跟语义学的“对立关系”概念结合起来，认为“F—G关系”反映的是接续关系的认知过程，“对立关系”反映的是接续关系的意义内容。接续助词“けど”和“のに”、接续词“しかし”和“ところが”的意义上的强弱差别是由于认知过程中“F—G关系”的显示程度高低造成的。该论文通过建立“F—G关系”与“对立关系”结合的理论模式，不仅成功地揭示了同一表达形式的多种意义用法之间的相互关系，也对不同表达形式的逆接关系作出了统一的理论解释。论文提出的这一理论模式对于解释其他接续关系如顺态接续的条件关系、因果关系等也具有重要的参考价值。另外，论文还从主体化的角度对接续助词“けど”和“のに”、接续词“しかし”和“ところが”进行了分析，这对日语的接续表达研究和我国的日语教学研究都具有重要的理论价值和实用价值。

接续关系是人的一种认知能力，也是一种认知行为。从语法的角度来看，接续关系和修饰关系有时往往很难分清楚。该论文从认知语言学的角度探讨逆接表达，是一个很有意义的尝试，必将对今后的研究产生深远的影响。该论文的后期写作是在日本国立千叶大学进行的，论文得到了日本专家的高度评价，也正说明了这一点。

苏鹰的博士论文即将正式出版，我为之感到非常欣慰。我国的日语学界正不断涌现出新一代的学者，我们的事业后继有人。我希望年轻一代能够尽快承担起重任，推动学术研究水平的不断发展和提高。

广东外语外贸大学教授、博士生导师
陈访泽
2008 年 9 月 20 日于白云山麓

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

論文評価書

本論文は、日本語の逆接接続表現から、「けど」「のに」「しかし」「ところが」という四つの表現を取り上げ、それらの用法の違いを認知言語学的な観点から理論的・統一的に説明しようとしたものである。

本論文の特徴は、認知言語学的な概念である「F-G 関係」と、論理的な概念である「対立関係」を組み合わせて、逆接接続表現を統一的に説明しようというところにある。本論では、「F-G 関係」をすべての接続表現に反映される「認知プロセス」としてとらえ、「対立関係」を意味内容ととらえることによって、いわゆる「逆接」の意味が「対立関係」によって生じることを示す。そして、「けど」と「のに」の違いを、その「対立関係」がどこまで希薄化するか、逆に言えば、「F-G 関係」がどこまで顕在化できるかによる違いとして規定し、同時にそれによって、[逆接][対比][展開][前置き]といった「けど」の様々な用法の違いを、「対立関係」の希薄化＝「F-G 関係」の顕在化の度合いの違いとして説明しようとする。「しかし」と「ところが」の違いもそれと平行的に、全く同じように説明される。

このような理論的枠組みを設けることによって、これまで接続助詞と接続詞という異なる品詞として別扱いにされてきた「けど」「のに」と「しかし」「ところが」に対して、本論文は全く同じ形での説明を与えることに成功した。さらに、これまではそれぞれ相互に連関の無い個別的な形でしか説明をされてこなかった、[逆接][対比][展開][前置き]というようなそれぞれの語の用法の違いを、論理的に関係づけることに成功した。

この2点に限っても、本論文が日本語教育において果たすであろう役割は大きなものがあると考えられる。すなわち、それぞれの接続表現において、その様々な用法をばらばらに学習するのではなく、このようにシステマティックなものとして理解することによって、大きな効果が得られるであろうことは十分に期待できる。

そればかりでなく、「F-G 関係」と「対立関係」による説明は、更に「対立関係」を「因果関係」「条件関係」などに置き換えることによって、他の接続表現へも応用できることが、すでに本論文中で示唆されている。すなわち、本論は逆接表現に限っての記述にはとどまっておらず、より包括的な接続表現全体についての理論の一部をなすものであり、また、日本語に限定的に適用される性質のものではないことも明らかである。したがって、言語普遍論の見地からも大きな可能性を見せるものであり、博士論文として十分に評価できるものと考える。

千葉大学人文社会科学研究科　教授　中川　裕

論文評価

蘇鷹氏のこの論文は、現代日本語の複合文において逆接関係を表示するいくつかの表現がいかなる認知論的な意味を持ち、相互に関係しあっているかを分析したものである。

その分析に当たって氏は二つの理論的用具を用いる。一つはヒトの認知様式に関してかねてから提案されている背景: 焦点理論である。この理論はもともと幼稚なものではあるが、これを氏は「F-G 関係」と呼び、背景的観点として利用する。他は対立関係の段階に関する強弱に関する仮定であって、それは「否定的対立、対比、前置き、展開」などの段階を認める。この二つの理論的用具をもちいて意味分析を行うことは一つの方法論的立場として理論的に承認できる。

蘇鷹氏は、代表的な接辞「け（れ）ど」と「のに」に関して前者が対立関係の全段階に現れるに対して「のに」は強い段階にしか現れないこと、接続語「しかし、ところが」についても同様な意味的な差異が見られることを指摘する。この見解はユニークであり、上の理論的用具によって導出した意味論的解釈として承認できるものである。

しかし、蘇鷹氏はこの結論を越えて、この解釈を「主体化理論」によって再解釈する。ラネカーの主張する限りでの「主体化理論」はもともとはほとんど使用に耐えないが、蘇鷹氏はこれを「話し手の思想の表現」に関する理論として利用して、接続表現二組の意味的差異の解釈に援用する。そしてそれは成功している。

以上のように、蘇鷹氏の論文は、理論的用具自身はけっして有用ではなかったが、理論的分析は非常に優れてものとなった。それはひとえに論理学者土屋俊氏と言語学者中川裕氏の有用な助言の与って力あるものであった。氏がこの優れた理論的分析を土台にして将来とも認知的にカテゴリー化した言語単位に関してより優れた理論的用具を用いて分析を進めていくことを期待する。これを期に中日両国の言語学研究集団が、いわゆる日本語学の枠を超えて、相互に緊密に交流して世界の言語研究の水準を向上させるに貢献することを望む。

千葉大学名誉教授　金子亨

前　言

本书是在2008年3月向广东外语外贸大学提交的博士论文《日本語における逆接接続表現—「けど・のに」及び「しかし・ところが」を中心に—》的基础上，经若干改动后写成的。

日语中的接续表现（包括接续词与接续助词）是形成相对较晚的词类之一，直到镰仓时代以后才在表现力日趋丰富的日语语法体系的支持下逐渐发展。迄今为止，由于日语中的接续表现使用率高，涉及面广，与其相关的研究可谓久盛不衰。随着语言学研究领域的不断拓展，方法论的不断创新，对接续表现的研究也呈多样性。尽管每一种理论，每一种方法都能在一定程度上解释若干问题，但是，有关接续表现的意义用法的多歧性及其系统理解机制等仍有待进一步阐明。

接续表现的多歧性研究，上个世纪五、六十年代日本的市川孝、佐久间鼎等从其逻辑意义的不同，提出了各自不同的分类方法。但分类方法大同小异。此外，山田孝雄、时枝诚记、松下大三郎等分别从词法与句法的角度对接续表现都进行过研究。而其后渡边实所提出的结合意义、功能、语法三个方面进行考察的方法最受称道。但因为渡边实的研究最后仍是以功能为主进行的分析，所以可以说至今为止还没有找到关于接续表现的系统的理解机制。

日语中，逆接接续表现通常被分析为能够表示多种意义功能的语言表现。以“けど”“のに”及“しかし”“ところが”为例，这些词除了具有逆接用法外，还具有很多其它的用法。先行研究中有很多关

于这类词的多用法的分析。但问题是：这些意义功能是怎样作为一个统一体存在的？个中的意义功能又是怎样出现和被应用的？这些问题都有待解决。

关于接续表现的研究，至今为止从词法、句法及篇章法的角度去研究的占了绝大多数。但这一传统分析方法已经渐露弊端。本文拟以逆接接续表现的意义连续性为重心，在先行研究的基础上，从语用论及认知语用学的立场出发，对逆接接续表现的意义用法作一个比较全面的分析。书中通过＜F－G 关系＞和＜对立关系＞的相对关系所构建的理论模型，总括性的分析了逆接接续表现的多种意义用法。＜F－G 关系＞是存在于“X＋接续表现＋Y”结构中的意义关系，是逆接接续表现程序意义的构成部分；＜对立关系＞是逆接接续表现和其他接续关系相区别的意义关系，是逆接接续表现特有的程序意义。通过分析，将＜对立关系＞确认为客体性意义，＜F－G 关系＞确认为主体性意义。通过这两种意义之间的相对关系（前景化与背景化）对逆接接续表现的多用法问题进行统一的分析说明。即：随着主体性意义的前景化，客体性意义逐渐成为背景意义。在这一过程中，逆接接续表现的意义用法呈多样化趋势。我们期待从这样一个变化过程中找出逆接接续表现乃至其他接续表现的系统的理解机制。

对日语学习者而言，为数众多的逆接接续表现是习得日语的难题之一。而对日语教师而言，如何将逆接接续表现的众多意义功能进行系统地教授也是一个问题。本人期望通过对日语逆接接续表现的一系列分析，能在日语逆接接续表现的具体学习和使用以及教授问题上有所贡献。

本书的顺利完稿，是与许多前辈、朋友的鼓励、支持分不开的。另外，在本书的编辑排版过程中，得到了华东理工大学出版社的同志

们，特别是陈勤女士的大力支持，在此表示衷心感谢。

由于逆接接续关系相当复杂，加之作者水平有限，本书一定还存在着这样那样的缺憾，期盼同行专家和广大读者不吝赐教，从而共同深化这一课题的研究。

苏 鹰

2008 年 9 月

目　次

1　序論

1.1　研究の背景と本研究の位置づけ …… 1
1.2　本研究の立場と方法 …… 4
1.3　本研究の目的 …… 5
1.4　論文の構成 …… 6

2　逆接接続表現

2.1　接続表現 …… 9
2.1.1　接続詞 …… 10
2.1.2　接続助詞 …… 12
2.1.3　本稿での取扱い …… 12
2.2　接続表現の位置づけ …… 13
2.2.1　関連性理論(Relevance theory) …… 13
2.2.2　文脈効果(contextual effect) …… 16
2.2.3　談話連結語(discourse connective)としての接続表現 …… 18
2.3　接続表現の意味機能 …… 20
2.3.1　概念的情報と手続き的情報 …… 22
2.3.2　手続き的情報を提供する接続表現 …… 24
2.3.3　まとめ …… 24
2.4　研究対象——逆接接続表現 …… 25
2.4.1　逆接についての疑問 …… 27
2.4.2　逆接接続表現の手続き的意味 …… 30

3　＜F-G 関係＞

3.1　FigureとGround …… 33
3.1.1　Talmyの説 …… 34

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3.1.2　Langackerの説 …… 35
3.1.3　山梨の説 …… 37
3.1.4　本稿での取扱い …… 39
3.2　単文における＜F-G 関係＞ …… 39
3.3　複文における＜F-G 関係＞ …… 41
3.3.1　先行研究 …… 43
3.3.2　「X＋逆接接続助詞＋Y」における＜F-G 関係＞ …… 46
3.4　連文における＜F-G 関係＞ …… 47
3.4.1　「X＋接続詞＋Y」における＜F-G 関係＞ …… 47
3.4.2　「X＋逆接接続詞＋Y」における＜F-G 関係＞ …… 50
3.5　まとめ …… 51

4　＜対立関係＞
4.1　逆接接続表現の手続き的意味――＜対立関係＞ …… 52
4.2　＜対立関係＞とは …… 55
4.3　否定による＜対立関係＞ …… 59
4.3.1　先行研究 …… 60
4.3.1.1　赤羽根(2002) …… 61
4.3.1.2　坂田(1999) …… 62
4.3.1.3　王学群(2003) …… 62
4.3.1.4　クワンチャイ・セークー(1999) …… 63
4.3.2　否定のレベル …… 64
4.3.2.1　語彙論レベルの否定 …… 67
4.3.2.2　統語論レベルの否定 …… 68
4.3.2.3　語用論レベルの否定 …… 70
4.3.2.4　まとめ …… 74
4.4　相違点による〈対立関係〉 …… 74
4.4.1　対比とは …… 75
4.4.1.1　格成分の対比 …… 76

4.4.1.2　副詞的成分の対比 …… 77
4.4.2　対比における「強勢的な対立関係」と「弱勢的な対立関係」…… 77
4.4.3　相違点による「弱勢的な対立関係」 …… 79
4.5　二項対立(疑似二項対立)→多項対立(疑似多項対立) …… 80
4.5.1　二項対立(疑似二項対立) …… 80
4.5.2　多項対立(疑似多項対立) …… 82
4.5.3　二項対立(疑似二項対立)から多項対立(疑似多項対立)へ …… 83
4.5.4　「X＋逆接接続表現＋Y」構造における＜対立関係＞ …… 84
4.6　本稿での取扱い …… 86
4.6.1　強勢的な対立関係 …… 86
4.6.2　弱勢的な対立関係 …… 87
4.7　形式間の可換性についてのアンケート調査 …… 89
4.7.1　「けど」・「のに」…… 90
4.7.2　「しかし」・「ところが」…… 91

5　逆接接続助詞「けど」

5.1　「けど」の諸用法 …… 96
5.2　「けど」の多用法についての先行研究 …… 100
5.2.1　破棄関係(中溝1998) …… 100
5.2.2　棄却用法と抑制用法(永田・大浜2001) …… 102
5.2.3　二つの手続き的意味①(Itani1992) …… 103
5.2.4　二つの手続き的意味②(尾谷2005) …… 104
5.3　「けど」の意味分析 …… 106
5.3.1　「けど」の文中用法 …… 107
5.3.1.1　[逆接]用法 …… 108
5.3.1.2　[対比]用法 …… 111
5.3.1.3　[展開]用法 …… 113

5.3.1.4 ［前置き］用法 …… 116
5.3.2 「けど」の文末用法 …… 118
5.3.2.1 接続助詞的用法 …… 119
5.3.2.2 終助詞的用法 …… 124
5.3.3 まとめ …… 126

6 逆接接続助詞「のに」
6.1 「のに」の諸用法 …… 129
6.1.1 従属的用法と非従属的用法(前田1995a) …… 131
6.1.2 完全文と言い指し文(熊野1999) …… 132
6.2 「のに」の多用法についての先行研究 …… 134
6.2.1 条件関係の直接的な否定(前田1995b) …… 134
6.2.2 知識の否定(衣畑2005) …… 135
6.2.3 対立項の必要性(今尾1993) …… 137
6.3 「のに」の意味分析 …… 140
6.3.1 「のに」の文中用法 …… 140
6.3.1.1 ［逆接］用法
6.3.1.2 ［対比］用法
6.3.2 「のに」の文末用法 …… 148
6.3.2.1 接続助詞的用法
6.3.2.2 終助詞的用法
6.3.3 まとめ …… 154

7 逆接接続詞「しかし」
7.1 「しかし」の諸用法 …… 157
7.1.1 五つの意味用法(岩澤1985) …… 158
7.1.2 三種類の働き(趙慧欣1998) …… 160
7.1.3 本稿での取扱い …… 161
7.2 「しかし」の多用法についての先行研究 …… 163
7.2.1 「しかし」の論理構造(坂原1985) …… 163
7.2.2 「しかし」の基本的意味(浜田1995) …… 165

7.2.3 「しかし」の基本機能(加藤2001) …… 167
7.3 「しかし」の意味分析 …… 169
7.3.1 [逆接]用法 …… 171
7.3.2 [対比]用法 …… 175
7.3.3 [展開]用法 …… 179
7.3.4 [転換]用法 …… 181
7.3.5 後件しか言語化されない場合 …… 184
7.3.6 前後件とも言語化されない場合 …… 187
7.4 まとめ …… 189

8 逆接接続詞「ところが」
8.1 「ところが」の諸用法 …… 191
8.1.1 『日本語文型辞典』(1998) …… 191
8.1.2 四種類の働き(趙慧欣1998) …… 193
8.2 「ところが」の多用法についての先行研究 …… 197
8.2.1 状況的説明(楠本2000) …… 197
8.2.2 意図的な対比(浜田1995) …… 199
8.3 「ところが」の意味分析 …… 203
8.3.1 [逆接]用法 …… 205
8.3.2 [対比]用法 …… 211
8.3.3 [展開]用法 …… 213
8.3.4 「ところが＋Y」構造 …… 216
8.3.5 「ところが」構造 …… 218
8.4 まとめ …… 219

9 結論
9.1 主体化(subjectification) …… 220
9.1.1 主体的意味と客体的意味 …… 222
9.1.2 主体的表現と客体的表現 …… 224
9.2 ＜F-G 関係＞と＜対立関係＞の組合せ …… 227
9.2.1 強勢的な対立関係 …… 229

9.2.2　弱勢的な対立関係 …… 230
9.2.3　「けど」の意味用法 …… 233
9.2.4　「のに」の意味用法 …… 233
9.2.5　「しかし」の意味用法 …… 234
9.2.6　「ところが」の意味用法 …… 234
9.3　後件(Y)への制限 …… 236
9.4　話し手の感情を表しやすい「のに」「ところが」 …… 240
9.4.1　「のに」の問題 …… 240
9.4.2　「ところが」の問題 …… 241
9.4.3　解決の困難性 …… 242
9.5　今後の展望 …… 244
9.5.1　＜F-G 関係＞について …… 244
9.5.2　話し手の感情について …… 245
9.5.3　推論の方法について …… 245
9.5.4　他の逆接接続表現の意味分析への適用 …… 246
9.5.5　順接接続表現の意味分析への適用 …… 246

参考文献 …… 247
謝辞 …… 256
公表された学術論文 …… 259
付録1 …… 260
付録2 …… 263
付録3 …… 264

1　序論

1.1　研究の背景と本研究の位置づけ

現代日本語の接続表現(接続詞及び接続助詞)は比較的新しく生まれたもので、ほとんどが他の品詞から転成してきたものである。それに、接続表現は種類が多く、用法も多岐にわたっている(市川1978、佐久間1990、長谷川1998など)。それに関する研究は、品詞論、統語論、機能論など伝統的な分析方法(山田1936a，b、時枝1950、芳賀1962、渡辺1971、松下1974、佐久間1983、阪倉1988、北原1993など)に従って論じられたものが多いが、近年盛んになった語用論や認知言語学の立場からは接続表現の全般を研究するものはまだ少ないようである(相原1985、渡部1995a. b、名嶋2004、尾谷2005など)。本稿は、語用論や認知言語学の立場から接続表現に属する逆接接続表現の意味用法について考察を進める。

接続詞は段落、文或いは文の構成成分(節・句・語)を相互に結びつけ、関係づけることを中心的機能とする単語である。橋本進吉と佐久間鼎は、接続詞を一品詞として認め、前後件を連結する機能を説明した。しかし、接続詞は品詞分類の規準のとり方によって、その所属が明確ではない場合が多い。副詞と近い関係にあり、所属認定が困難な場合がある。そのため、接続詞という品詞を認めず、副詞に属すると考えている学者もいる。山田(1936a トル)は接続詞を品詞として立てることに反対している。山田は『日本文法論』において概ね次のように考えた。西洋の文典に説くConjunction(「接続詞」)に当たるものは国語の接続助詞であって、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com